

ヨウシュヤマゴボウ

山田真砂年

小鳥来るたび窓開けて青き空

銚する花火の中に四面楚歌

名月にテロリストのごと星寄りぬ

ヨウシュヤマゴボウ路地へ斜めの秋日差し

西鶴忌昼をしのげるカツブ麺

水澄むや鋼光りに鯉の背ナ

鮎はいま川の真中を落ち行ける

落し水さらさら恙なき音す

峠の子の黍かき分けて出で来たる

落蟬に大胆な蟻五六匹

秋天や潮目は龍のごと沖へ

風吹いて海には海の秋のこゑ

軍艦のゐない港や羊雲

高階に虫籠吊れば街灯る

菊月の日暮れ灯さぬ静けさに

参拝の前に熱々おでん食ふ

煌々と灯る納<sup>ふだしょ</sup>経所や秋黴雨

数珠玉の仏舎利ほどの白さかな

秋薔薇囁くやうに話しあり

秋海棠けふは晴れとも曇りとも

ハロウインのお菓子の残り貰ひけり

平民のやうな一重の秋の薔薇

父と子の野に赤のまま赤のまま

切株のあればあたりに秋の声

沈金の閑かさにあり女郎花